

輪島漆再生のための調査研究事業

輪島漆再生プロジェクト実行委員会
事務局 安嶋 是晴

1 研究背景と目的

国内で消費されている漆の約98%は中国産である(図1)。現在、国内で漆の木を育成し、業として漆を生産・販売する体制が維持されているのは、岩手のみである。

過去には、輪島でも多くの漆の木が生育し、輪島塗の生産に活用されていた。輪島は漆の木が育ちやすい気候で、良質な漆の木が群生していたことも漆器産地形成の重要な要因だったといえる。

輪島でも中国産漆への高い依存度には危機感を持っていた。昭和46年から平成11年までの約30年間、植栽事業、苗木の無料配布など、多様な事業が行われてきた(図2)。130haの広大な土地に13万本、約1億8千万円の事業費が投じられている。しかしその事業はほとんど

まくいかず、平成22年の調査では、1700本しか残っていないことが確認されている。輪島も他地域と同様、安価な中国産漆の輸入増加によって漆生産はほぼ消滅したといえる。

本来伝統的工芸品は、地元の資材と技術で担われるべきものである。しかし現在の漆器産業が使用する漆は中国産となっている。その大きな理由は中国産漆の5倍という価格である。見た目にはほとんど差がなく、機能面でも比較しにくい状況で、中国産漆へシフトするのはやむを得ない。さらに漆器の売上が低迷し、割高な国産漆の需要低下に拍車をかけている。

確かに中国産でも質が良い漆があるのは事実である。しかし独自の地域風土で生まれ、耐久性も高く、独特の光沢と艶を生み出す国産漆で漆器をつくることは、漆器の付加価値を高めるとともに、地域のアイデンティティを再構築することになる。また漆器産業が停滞し、光明が見いだせない今、輪島塗を輪島産の資材と技術でつくるという原点に立ち返ることは、極めて有効であると考え

図1

漆消費量の推移					[単位:kg]	
西暦	年号	消費量	日本産漆	外国産漆	外国産の割合	
1885	明治20	792,000	782,000	10,000	1.3	
1905	明治40	832,000	470,000	362,000	43.5	
1913	大正3	857,000	269,000	588,000	68.6	
1910	大正10	1,042,500	67,500	975,000	93.5	
1923	大正13	1,894,000	75,000	1,819,000	96	
1931	昭和6	1,604,000	38,000	1,566,000	97.6	
1936	昭和11	2,138,000	44,000	2,094,000	97.9	
1941	昭和16	758,000	30,000	728,000	96	
1951	昭和26	549,000	25,000	524,000	95.4	
1956	昭和31	665,000	13,000	652,000	98	
1961	昭和36	447,000	31,000	416,000	93.1	
1966	昭和41	367,000	7,000	360,000	98.1	
1971	昭和46	496,000	6,000	490,000	98.8	
1976	昭和51	408,400	5,400	403,000	98.7	
1979	昭和54	478,749	6,405	472,344	98.7	
1981	昭和56	358,000	6,391	351,609	98.2	
1986	昭和61	308,887	5,160	303,727	98.3	
1991	平成3	285,981	4,982	280,999	98.3	
1996	平成8	209,905	3,190	206,715	98.5	
2001	平成13	118,976	1,729	117,247	98.5	
2006	平成18	98,868	1,326	97,542	98.7	
2008	平成20	72,062	1,586	70,476	97.8	

※消費量=国内生産量+輸入量
漆を科学する会資料および日本漆工協会資料より作成

さらに別な視点からみると、近年、中国との政治的な軋轢の中、レアアースのように過度に外国資源に依存する状態が極めて危険だということがわかってきた。99%中国産に依存する漆は、今後外交問題によって、漆器産地に災いをもたらす可能性も高い。今一度、国産漆のあり方を考える時期に来ている。

このような文化的な背景や政治的な問題、製品としての付加価値づくりなどの観点から国産漆を再生させることが必要だと考えた。

図 2

	面積 (ha)		植栽本数 (本)		事業費(円)	
	植栽	苗木無料配布	植栽	苗木無料配布	植栽	苗木無料配布
昭和46年	4.0		4,000		1,240,000	
昭和47年	4.0		4,000		1,620,000	
昭和48年	4.0		4,000		1,880,000	
昭和49年	4.0		4,000		3,248,000	
昭和50年	4.0		4,000		4,500,000	
昭和51年	5.0		5,000		6,326,000	
昭和52年	10.0		10,000			
昭和53年	10.0		10,000			
昭和54年	10.0		10,000		70,534,000	
昭和55年	10.0		10,000			
昭和56年	10.0		10,000			
昭和57年	5.0		6,000			
昭和58年	6.0		7,200			
昭和59年	5.0	1.0	6,300	1,000	83,235,000	170,000
昭和60年	5.0	2.0	6,000	2,000		340,000
昭和61年	4.0	2.0	4,800	2,000		350,000
昭和62年		2.0		2,000		360,000
昭和63年		2.0		2,000		360,000
平成元年		2.0		2,000		360,000
平成2年		2.0		2,000		360,000
平成3年		2.0		2,000		700,000
平成4年		2.0		2,000		700,000
平成5年		2.5		2,500		700,000
平成6年		2.5		2,500		700,000
平成7年		2.5		2,500		700,000
平成8年		1.5		1,500		400,000
平成9年		1.5		1,500		400,000
平成10年		1.5		1,500		400,000
平成11年		1.0		1,000		280,000
小計	100.0	30.0	105,300	30,000	172,583,000	7,280,000
計		130.0		135,300		179,863,000

2. 申請事業の内容とその特徴

輪島漆再生プロジェクトは、植栽した苗が成木になるまでの10年サイクルのプロジェクトであり、本事業は1年目のキックオフとして位置づけた。今回は、漆の活用サイクルを「植える」「掻く」「つくる」を抽出し、市民参加型イベントの実験・啓発事業を行い、課題を探りながら、多くの人に輪島漆再生の意義を知ってもらおうというものである。

図3 漆の活用サイクルにおける作業プロセス

作業プロセス	具体的作業	作業項目	担い手	輪島市内の数
	漆の植栽	植える	農家、林家	現状なし
	漆の生育	育てる	農家、林家	現状なし
	漆掻き	掻く	漆掻き職人	1名
	漆精製・販売	つくる・売る(漆)	漆精製販売業者	2社+漆器組合
	漆器製作	つくる(漆器)	漆器職人	1465名(2010年)
	漆器販売	売る	塗師屋	197事業所(2010年)
	漆器使用	使う	消費者	多数

(1) 植える事業

植える事業とは、一般市民をはじめ、漆器に関わる人たちが、苗木づくり・植栽・木の育成方法を、石川県林業試験場の研究員や苗木育成の経験者から学ぶ機会を持ち、実際に植栽を实践するものである。植栽後、下草刈りを行うなど漆山を整備するイベントも行う。本事業に関しては、4月10日および10月29日に実施した。

(2) 掻く事業

掻く事業とは、樹液を採取し、精製、販売する状態にすることである。輪島市縄又に住む奥能登唯一の87歳の漆掻きを講師に迎え、講義を受け、技術の伝承も含め、漆かきを体験する。また6月から10月までの期間、実際に輪島に残存する漆の木を掻いてもらい、輪島漆の試供品をつくとともに、伐採後の漆の木の活用法を検討する。漆掻きのイベントは、8月5日に実施した。

(3) つくる事業について

つくる事業とは、実際に採取された輪島漆と中国産漆、さらに国産漆の代表的な浄法寺漆(岩手県)を見比べる機会を持つとともに、その違いを学ぶ。採取された輪島漆で試作品をつくり、仕上がりで中国産漆とはどのような違いがでるのか調べていく。

3 事業実施報告

実施事業①

漆の植栽(植える事業)

日時	2011年4月10日
場所	石川県輪島市南志見地区(若宮氏所有)
本数	200本程度
方法	分根苗を植栽
出席	プロジェクトメンバー4名

新年度に入り、まず植栽を実施した。土地を探したが、適地が見つからず、代表の若宮の土地で植栽を実施した。苗木については、現存する漆の木の根からつくった「分根苗」を用いて実施し、200本程度の植栽を行った。

実施事業②

輪島漆の生産(掻く事業)

日時	2011年6月～11月
場所	石川県輪島市縄又(古地氏所有)
職人	古地喜太郎氏
本数	80本程度

6月以降、輪島で唯一の漆掻き職人である古地喜太郎氏に漆掻きを委託した。6月から11月までの期間、約80本の木を掻いてもらう。最終的に1貫目弱(3.75kg)を採取。その後、掻いた漆を使い、試作品の作成を開始した。

実施事業③

輪島漆、浄法寺漆、中国産漆の比較および御椀の製作（つくる事業）

日時 2011年12月～3月

場所 石川県輪島市西脇町

職人 須田麻美氏

個数 9個（各漆の塗り方、塗り重ねのパターンを変えて製作）

12月に古地氏の漆を受け取り、製作を開始。製作に先立ち輪島漆、浄法寺産漆、中国産漆の比較を行った。

輪島産漆は、6月から11月に採取された漆が混合されている。かなり粘り気が多い。一方で浄法寺の漆の場合、採取の時期によって漆を種別しており、初夏の漆を初漆（はつうるし）、真夏の漆を盛漆（さかりうるし）、秋の漆を遅漆（おそうるし）と呼び、今回使用したのは盛漆である。中国産漆は、さらさらして粘り気は少ない。これらの成分はほとんど差がないようである。仕上がりは、国産漆は中国産に比べ温かみのある膨らんだ感じに仕上がる。また国産漆は甘い香りがするが、中国産漆は少しツンとした香りがする。

耐久実験については、実際に乾いて落ち着くまで寝かせたほうがよいとのことで、現在は仕上げをして、今後、夏から秋にかけて食洗機などを使用した強度実験、劣化実験を行う。

ただし重要なのは、漆の精製方法によって、かなり仕上がりも変化するらしい。つまり輪島塗の職人は中国産漆のポテンシャルを最大限発揮しうる漆精製を行っている。いくら質の良い国産漆でも精製が手抜きならば、優れた仕上がりにならない。その仕上がりも「善し」「悪し」というよりも、「好き」「嫌い」という好みの判断基準も重要になってくることも留意すべきである。

実施事業④

第1回 漆の里再発見 研修会（植える事業、掻く事業）

テーマ 「漆」と「漆掻き」

日時 2011年8月6日10時～16時

内容 講義1 漆掻きとは（講師）若宮隆志（プロジェクト代表）

講義2 漆とウルシ（講師）小谷二郎（石川県林業試験場）

視察1 漆工場見学（説明）四十澤等（四十澤漆店）

視察2 漆精製現場見学（説明）関山秀信（輪島漆器組合漆工場長）

実習・見学 輪島市縄又植栽地 漆掻き体験（講師）古地喜太郎

出席 30名

8月には、研修会を実施した。漆芸家の若宮氏からは、ものづくりを行う立場から国産漆の意義を講義いただいた。石川県林業試験場の小谷氏からは、石川県で行われていた産地別生育調査についてご報告いただき、輪島産の漆の木が比較的多く取れる調査結果を報告し、植栽の推進に輪島産の漆の木を使うことを提案した。午後からは、漆工場を見学し、漆に熱

を与え攪拌させるクロメヤナヤシの作業を見学した。

また縄又の植栽地に行き、古地氏から漆掻きの技を見せていただき、指導を受けながら体験も実施した。

実施事業⑤

第2回	漆の里再発見 研修会 (植える事業)
テーマ	漆の植栽を学ぶ
日時	2011年10月29日13時～16時
内容	講義1 奥久慈漆再生の取り組みと植栽の技術 (講師) 神長正則 (奥久慈漆生産組合会長)
	実習 輪島市熊野 漆の植栽実施
出席	22名

10月には、実際に漆の植栽を先駆的に取り組んでいる茨城県の神長氏をお招きして、奥久慈漆再生の取り組みについて講義を頂き、午後からは実際に現場に赴き植栽を行った。

実施事業⑥

震災による被災地支援 (その他)	
岩手産国産漆を使った仮設住宅の「表札づくり」の協力	
日時	2011年6月28日
場所	高野漆店
内容	岩手県陸前高田市の仮設住宅につける表札に 岩手産の国産漆を使い仕上げる事業の企画・協力

震災直後の6月、岩手県陸前高田市の仮設住宅でボランティアを行う、金沢大学の学生と漆塗りの表札づくりを行う。震災つながりて提供を受けた能登半島のアテの木に学生が

字を書き、その上に岩手産の漆をかけた。国産漆の存在をPRするのに良い機会であった。



実施事業②輪島漆の生産



実施事業③輪島漆、浄法寺漆、中国産漆の比較



実施事業④研修会風景



実施事業④研修会風景



実施事業⑤研修会風景



実施事業⑥国産漆の表札づくり

4. 成果と今後について

今年度の研修などの地道な取り組みは、地元紙にも多く取り上げられ、国産漆、輪島産漆に対する意識は格段に上昇し、啓発という点では成功した。今後も持続的に研修を行うとともに、計画的に植栽を行っていく。

輪島漆の復活は、素材、技術すべてが輪島で作られた輪島塗の再生となる。輪島塗に新しい付加価値を生み、輪島漆器産業の振興に寄与する可能性がある。

さらに、輪島漆再生の拡大プロセスには、新たなビジネスが創造する可能性がある。漆掻き職人や国産漆販売業をはじめ、植栽を進めるため山を整備する建設業者、農林業者などの雇用が生まれる。現在の重機・機器など持っている建設業者は、副業として即対応が可能であろう。

また漆山の整備により循環型社会が構築され里山が再生する可能性を持つのである。輪島漆の再生では、新産業の創出、既存産業の復活、山の環境保全を総合的に行うことができるのである。

今後、民間や行政などが個別に行ってきた漆の事業を一元的にとらえ、10ヶ年プランを構築し、特に、単なる農林業者、漆掻き職人、漆器業者の直線的な流通プロセスではなく、市民も積極的に事業に関わり、積極的なボランティア募集やトラスト制度の構築、苗木の寄付活動など市民参加型事業として成長させていく。